SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

向坂(1976，2006) 浜名湖南部陸地説の否定

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加茂, 豊策 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024815

向坂（1976, 2006）浜名湖南部陸地説の否定

加　茂　豊　策

1. はじめに

加茂（2005）は「明応（今切決壊）以前の浜名湖南部の地形」を論述した.

向坂（2006）は静岡地学第93号で,『「明応（今切決壊）以前の浜名湖の地形」を読んで』で，加茂（2005）の指摘を一部は肯定したが，改めて浜名湖南部陸地説を唱えた.

加茂（2005）が指摘したのは，浜松市教育委員会（1976）が「伊場木簡」に記載した「古代の浜名湖推定図」·向坂（1976）の「古代の浜名湖」（新居郷）で古代の川跡とした深みは昭和25年の干拓事業による浚渫跡であり，また嶋·向坂（1976）が考古学ジャーナル·128で描画した「古代の浜名湖」で古代の川跡とした深みは昭和23年の干拓事業による浚渫跡であったことである．向坂（2006）は「図示した水路は，後世の水路を参考にしたものである」といった言い訳めいた表現で誤図であることを認めた．また「水路の位置·形状は，正否の関わるほど重要な要素ではない」とし，改めて向坂（2006）は「浜名湖南部陸地説」の根拠を提示した.

2. 5点に整理·要約された向坂私見に対する批正

(1) 川跡と浜名湖南部陸地説：地形図では水路の位置·形状は最重要である．軽視してはならない．また後世の干拓に伴う浚渫跡を古代の川跡としたことは最重要の現地調査を怠ったことを示している．「古代の浜名湖推定図」は地形図であるから，陸地·川·浜名湖·遠州灘などが正しく図示されていなければならない．浜松市教育委員会（1976）「伊場木簡」の誤った「古代の浜名湖推定図」がそのまま町史に引用されたり，浜松市博物館発行の書物·中学校教科書副読本などに修正引用されている．誤った歴史観·地形観が育ってしまう．極めて遺憾である.

(2) 弁天島海底遺跡発掘の井戸枠：「井戸枠3基は至近距離にあり，中に土器が遺棄されているのは不自然であるから井戸枠とは思えないと加茂（2005）は主張する」と向坂（2006）は言及しているが，そうではない．「高さ114 cm程度の木枠を砂層地に据えて，飲料に適する地下水が湧水することなどあり得ない」として，湖辺農民の簡易井戸の制作例を示したのである．そして木枠の用途は飲料水採取以外の用途を探すべきだと示唆した．弁天島海底遺跡調査報告書では井戸枠としているが，実質責任者市原は私信（2006.7）で「人の生活に必要な井戸の機能を果たしたのだろうかという疑念，ここから採取される水はひどいものだったのではと思ったことは否定しません」と疑念を抱いたとしている.

南部陸地説を唱える人達はぜひ海と湖に接する場所を選び，深さ114 cm程度の木枠を据えて，湧

浜松市雄踏町宇布見9552－7

水が出るのか出ないのか，どんな湧水が出るのか公開実験して頂きたい．

(3) 宇利山川流域で発掘された貝化石：三ヶ日町宇利山川流域で発掘されたサルボウなどの二枚貝の化石については三ヶ日分室職員から「宇利山川中流部三ヶ日高校東の稲田地下から工事の際発掘されたこと，発掘者はすでに他界していること，古代850年以前通行が多かった頃は町内各河川下流が入江であつたため，上下だけでなく，湾曲した街道で旅人は苦労したのではないか」と説明を受けた．発掘場所が沖積低地であるので，古代猪鼻湖が海辺であったとする根拠になり得る．

(4) 篠原・宇布見・山崎の塩浜：江戸時代潟湖浜名湖の東海辺に塩浜は存在した．ラグーンの南側に篠原の塩浜，北側海域に宇布見・山崎の塩浜があった．篠原塩浜の南側には東方から伸びた砂堤があった．そんな地形の場所に塩浜が存在した．塩浜は等粒状の粗砂が堆積した海辺でないと成立しない．長期間陸地であれば泥土が混じる．混砂泥の土壌から等粒状の砂地になるなどあり得ない．後背湿地の池沼であればなおさらである．

また新居関所は柏原（現新居駅南）から1707年現在地に移転している．そのとき塩濱・瀬先・洲崎と地籍名が記されている内山地と柏原の広大な芝間地が交換されている．交換された内山地が整然とした宿場町になった．干潟が埋め立てられ開発されたためである．交換される以前地籍名のように湖岸海浜は塩浜だったのである．またそれより西区域では現在でも地下にピート層がある．

(5) コアサンプルの堆積年代：引用した都司ら（1988）のコアサンプルHAM98-6には760 ± 50BP，HAM98-8には590 ± 60BP，3850 ± 80BPの堆積年代が記載されている．また測点が浜名湖南部の海域であることを示す図も並記してある．層序に不整合面は読み取れない．向坂（2006）は「3,850 ± 80BPの記述を見落とし，年代測定値が12～14世紀ということでは古代に陸地だったことを否定する根拠にならない」としている．「層序は整合であり，HAM98-8の上層堆積年代が590 ± 60BP，下層堆積年代が3,850 ± 80BPである上，測点が海域であるから測点区域が古代海域であった」と結論するのは当然である．また向坂（2006）は「湖底堆積物がどのような性格のものか私には分からない」としているが，都司ら（1998）の文献を引用しているとしている．その原文献には研究調査の目的・堆積砂礫の特徴・分析結果などが詳細に記述されている．原文献を再度熟読すべきである．

3. 向坂（2006）浜名湖南部陸地説の否定

(1) 湖底遺跡の存在：向坂（2006）は「浜名湖南部の湖底には7カ所ほど原始・古代の遺跡＝集落跡が確認されている」とし，図1のような浜名湖湖底遺跡分布図を掲載した．しかし，土器片発見場所が集落跡であるという根拠をあげていない．

そこで，向坂が遺跡＝集落跡とした区域に番号を付け，土器発見状況などを表にまとめた．図中遺跡名が書かれているのは1だけであるので遺跡名をつ

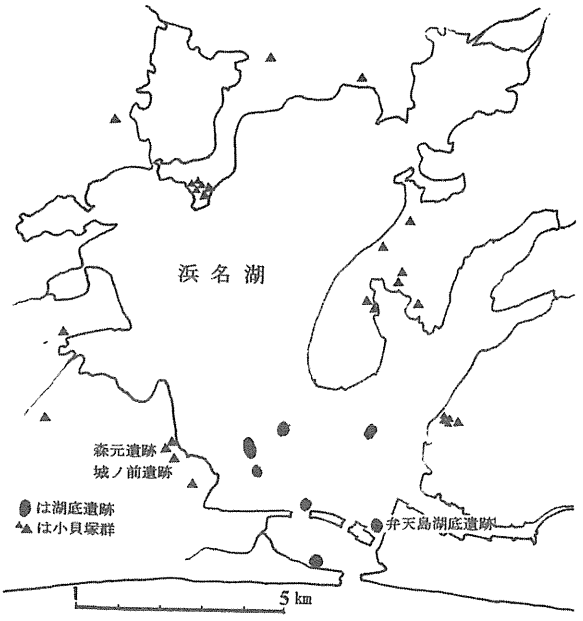


図1．向坂（2006）の浜名湖湖底遺跡．静岡県地学会の許可を得て転載．

けた．表中，報告書または論文として公表されているのは弁天島海底遺跡と新居町沖湖底遺跡だけである．浜松市博物館職員の協力により，各遺跡を文献により確認した．

1. 弁天島海底遺跡．木枠3点．土師器多数．舞阪町教育委員会（1972）．
2. 新居町沖湖底遺跡．発掘土器片53点+26．嶋・向坂（1976），新居町（1986）．
3. スモテ遺跡．発掘土器片44点+34．新居町（1986）．水深1.3m付近から焼き物が出土する．
4. 西浜名橋下遺跡．発掘土器片18点+23．新居町（1986）．
5. 新居弁天遺跡．土器を拾い上げていた·詳細不明．舞阪町（1989）．
6. 村櫛海水浴場西南遺跡．点数不明．舞阪町（1989）．昭和54年（1979）には舞阪町の神田潤氏から，村櫛海水浴場の西南水深2ｍの湖底から上がった土器類が届けられ，続いて夏目昌彦氏と大場夏男氏が，同じ場所で集めた土器も届けられた．
7. 浜名湖大橋北遺跡．詳細不明．浜松市博物館（1997）．表紙に縄文土器の破片写真がある．

(2) 遺跡の解釈：弁天島海底遺跡発掘調査概報は井戸枠としているが，「ここから採取される水はひどいものだった」と疑念をもっていた市原（1975）は「弁天海辺は季節的漁村だった」という表題で，「せいぜい季節的に営まれた漁村ではないか」とし，「その母体となった集落は，伊場遺跡や中薄遺跡などが比定される可能性がきわめて強い」と論述している．生活場所ではなく，生活の本拠から出向いた作業場ではなかったと類推している．

新居町沖湖底遺跡とスモテ遺跡は隣接地にあり，発見収拾点数は極めて多い．土器破片についての詳細な描画図·記述はあるが，遺跡としての性格は論じられていない．

加茂（2005）は新居町沖湖底遺跡付近には古代干潟が存在し，漁労などの作業場であったと推定した．それは天竜川からの沿岸漂砂が高師山丘陵にさえぎられ，ヨドミとなり，干潟として堆積する地形的位置にあるからである．ちなみに新居町（1986b）が「この砂礫の由来は筆者には解けない」としているが，著者も含めて新居·舞阪·雄踏の漁民はこの海域を「ジャリトリ」と言い，多くの漁民にはこの付近の礫が天竜川からの流出砂礫であることは常識である．

村櫛海水浴場西南遺跡は発見収拾土器破片数の記録がなく，浜名湖大橋北遺跡の土器破片は「博物館だより」の表紙を飾っている1点のみである．新居弁天遺跡も発見土器片は1個だけのようである．また西浜名橋下遺跡·新居弁天遺跡について，新居町（1986b）は新居町史で「二次堆積の可能性も否定できない」としながら，「今は四地区とも遺跡とみなしておこうと思う」としている．湖内で記録された土器片は全て漁民が発見収拾したものである．漁民が発見届け出た土器片が一個であってもその場所を遺跡とし，さらに遺跡＝集落跡としている．

従って土器片発見場所の詳細な報告書が存在しない限り，集落跡とは認め難い（問い合わせに現浜松市博物館長·学芸員は上記資料以外研究文献は存在しないと解答した）．

(3) セタシジミの解釈：向坂（2006）は「新居町森元遺跡の発掘調査では，上層の第1貝層ではセタシジミが主体を占め」とし，「古代に淡水域だった浜名湖沿岸」と古代淡水説の根拠にしている．

森元遺跡の発掘調査は専門の調査機関に委託したものでなく，新居町の有識者が担当した．セダシジミの同定を認識していると思われる方は名簿に見られず，シジミ化石の同定依頼の記事もない．向坂私信（2006.3）は「浜名湖沿岸には，古代から中世にかけての小規模な貝塚が分布しています．貝

の専門家による同定ではありませんが，主体はシジミです」と記述している．本論ではこの知見については一切触れていない．これは向坂がセタシジミとヤマトシジミの同定の難しさを理解し，森元遺跡のセタシジミに疑念を抱いていることを表している．またこの項に「鹹水域から汽水域へとする加茂（2005)」とあるが，このような内容はどこにも記述されていない．

(4) 古代浜名湖南部の形状：市原（1975）は「遺跡の景観は，海岸平野から突出した砂嘴上に立地した遺跡である．砂嘴の幅もせまく，南･北に浜名湖と遠州灘がじかに面しているのであって，とても水田経営を行う自然環境をそなえていない」とし，「三方原台地と高師山台地が両側からせばまる約5キロ程の広い湾口が内湾に直接続いていたはずである」と古代浜名湖南部の形状を推定している．

(5) 浜名湖南部陸地説の否定：向坂（2006）は浜名湖湖底遺跡分布図を提示したが，これは陸地説を唱えた出発点である．湖底遺跡＝集落跡とする根拠になり得る調査報告書･記録が無い．

湖底から発掘された土器片から過去を推定するには，土器がその場で使われ残されたものなのか，流されてきたものか，船から落とした（捨てた）ものなのかを見極めなければならない．また使われたものならば，生活場所なのか，作業場なのか，交通水路の一隅なのか十分調査して遺跡の性格を論じなければならない．

最も可能性がある弁天島海底遺跡でさえ，発掘調査責任者が集落跡に疑問符をつけているのであるから，新居町沖湖底遺跡も季節的作業場として捉えるべきであろう．そして他の場所で発見採取された土器片は流れてきたものとか落としたものとすべきだろう．

向坂（1976）は「浜名湖南部一帯は久しく陸地であって，縄文時代には森林地帯であり，弥生時代に入ってからは，水田のひらけた土地柄であった」としていたが，向坂（2006）では新居町沖湖底遺跡付近についてだけ「照葉樹林が必要であり」とし，また「森林や湿地帯が広がる陸地だった」と主張が軟化している．しかし，浜名湖南部のどの海域が森林地帯であったか，どこが湿地帯であったかなど根拠をあげて説明した，批判に耐え得る古代浜名湖推定地形図を提示することができない．重要なことは浜名湖南部がいつ頃陸地化したのか，また縄文･弥生時代陸地であった区域がいつ，どんな自然現象で浅瀬化したのか論究できていない．

向坂（1976）は「古墳時代中期のころ、少なくとも2～3 m，今日より地盤が高かった」，「縄文時代晩期後半には，この砂丘が陸化していたこと，弥生時代後期前半には，少なくとも1m以上の相対的海水準の低下があったこと」，「当時の海水準を現在より2ｍ低かった」とした上で，古代浜名湖推定･3図を等深線図の－2.5 ｍを選んで図化したと説明した．ところが，向坂（2006，第93号:P15）では「現海面下1～1.5 ｍから縄文時代前期～晩期の土器が出土する．この時代は6千年前で海水準が現在より3 ｍ程上昇したとされる「縄文海進」期に当たる」とし（すると縄文人は海面下4～4.5 ｍの海底で生活していたことになる），さらに「約6千年間に6ｍ前後沈降したことを示している」と説明している．この向坂（2006）の論述は理解できない．また，隆起･沈降に関わる海水準の変動について，地学者の描く汎世界的変化と嶋･向坂（1976）や新居町（1986）が描く遠江地方の海面推定変化が正反対なほど極端に違うのをどう解釈してよいか理解しがたい．

向坂（1976）浜名湖南部陸地説の誤りの起点は現浜名湖底の地形が往古から不変であつたとしたことにある．加茂（2001, 2003, 2005）は「浜名湾南部の海が主として古天竜川から流出し，海岸流によ

り東から西に運ばれ，順次堆積し浅瀬を形成した」と論述した．また，加茂（2005）で引用した都司ら（1998）HAM98-8の堆積年代のデータ（静岡地学，第92号P14）は水深1 mのコアサンプルである．湖底下1 mで3,850 ± 80BPを示している．この時代湖底では堆積が継続したのである．また図2に示した池谷ら（1987）の85H-3のコアサンプルでは湖底下約35 mに鍵層Ahが記述されている．鍵層Ah（アカホヤ火山灰）は6,300年前とされる．湖棚測点85H-3の砂層は約6,300年前より堆積したことを示す．故に縄文·弥生時代新居町沖湖底付近だけがヨドミのため，干潟であり，他区域は海であったとすべきである．

総合して，再提示された向坂（2006）浜名湖南部陸地説は向坂（1976）の陸地説·古代浜名湖推定図共々否定せざるを得ない．

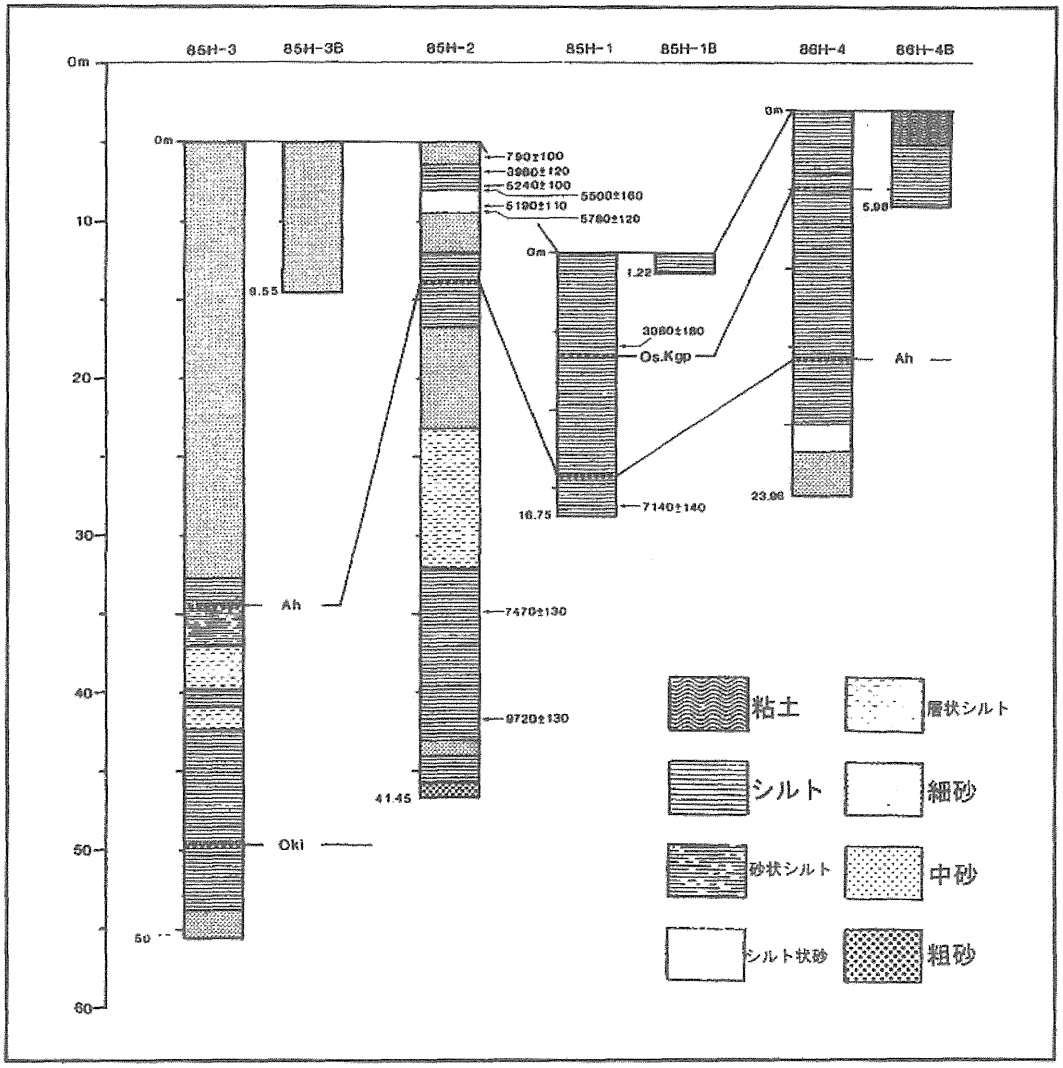


図2．池谷ほか（1987）のボーリング柱状試料．
静岡大学地球科学研究報告編集委員会より許可を得て転載．

4. 今後の課題

誤図であることが明らかになった浜松市教育委員会（1976）の「古代の浜名湖推定図」を引用掲載した新居町（1986a），修正引用した浜松市博物館（2004）の「浜松の歴史」・浜松市教育会館（2003）の「のびゆく浜松」などの該当図は改めなければならない．また浜松市教育委員会（1976），嶋・向坂（1976），向坂（1976）の古代の浜名湖3図は，今後引用掲載されるべきものではないと筆者は考える．

浜松市教育委員会は中学校編「のびゆく浜松」の改訂に当たり，「根拠を明白にして正確な記述をするよう」教育長から指示がでていると聞く．幸いである．

引用文献

新居町（1986）：新居町史第1巻. 新居町, 993p.

新居町（1986）：新居町史第4巻. 新居町, 575p.

浜松市博物館（1997）：表紙. 浜松市博物館だより, 16, 1.

浜松市博物館（2004）：浜松の歴史.浜松市博物館, p102.

浜松市教育委員会（1976）：伊場木簡. 伊場遺跡発掘調査報告書第1冊, 浜松市教育委員会, 31p.

市原壽文（1975）：弁天海辺は季節的漁村だった. 歴史読本, 20（15）, 60-65.

池谷仙之・和田秀樹・大森真央（1987）：浜名湖のボーリング柱状試料について, 静岡大学地球科学研究報告, 13, 67-111.

加茂豊策（2001）：浜名湖の起源と湖口変遷. 静岡地学, 84, 29-36.

加茂豊策（2003）：天竜川の変遷と浜松市南部の沿岸低地造成の関係について. 静岡地学, 88, 21-28.

加茂豊策（2005）：明応（今切決壊）以前の浜名湖南部の地形. 静岡地学, 92, 11-24.

舞阪町（1989）：舞阪町史上巻. 舞阪町, 941p.

舞阪町教育委員会（1972）：浜名湖弁天島海底遺跡発掘調査概報. 舞阪町教育委員会, 70p.

向坂鋼二（1976）：古代の浜名湖. 新居郷, 6, 3-7.

向坂鋼二（2006）：「明応（今切決壊）以前の浜名湖の地形」を読んで. 静岡地学, 93, 13-15.

嶋　竹秋・向坂鋼二（1976）：浜名湖新居町沖湖底遺跡調査予報. 考古学ジャーナル, 128, 18-22.

都司嘉宣・岡村　真・松岡裕美・村上嘉謙（1998）：浜名湖の湖底堆積物中の津波痕跡調査. 歴史地震, 14, 101-113.